

世界の主要登攀2013年

池田常道（日本山岳会会員）

【ネパール】

1. エヴェレスト・リンチ事件

4月27日、シェルパが登山者に集団暴行を加えるという前代未聞の不祥事がエヴェレスト（8,848メートル）で起きた。イタリアのシモーネ・モーロ、スイスのウエリ・シュテック、英国のジョナサン・グリフィスが順応のためローツェ・フェースを登高中、公募隊のルート工作に従事していたシェルパたちと遭遇した。モーロたちはその左手50メートルばかりのところをロープも付けずに登り、7,200メートル地点にあったテントに向かった。そのとき張ってあったロープをまたいで通ったのだが、このなげない行為で侮辱されたと怒ったシェルパと激しい口論になった。治まらない彼らは、6,400メートル地点のABCに帰ってから100名近くが徒党を組んで一行を襲い、投石、殴打、キックを繰り返した。身の危険を感じた3人は、その夜のうちにBCまで避退した。のちに当局が和解を演出したが、新ルートからの無酸素登頂を狙ったモーロたちに登山を続行する意欲を失わせるに十分な事件だった。

モーロ同様に無酸素で南西壁の新ルートを目ざしていたカザフのデニス・ウルブコとロシアのアレクセイ・ボロトフは、ローツェ・フェースの7,200メートルを往復したあと（上記のテントはこのとき設営されたものである）、休養のためいったんディンポチェに降りていた。事件を聞いてBCに戻る途中に出会ったシェルパの一団は、彼らがモーロの友人だと知っていて、ズボンから一物を取り出して挑発してきた。

アイスフォールでシェルパたちと遭遇するのを避けた2人はヌプツェ寄りの山腹をトラバースしてウェスタン・クウムに向かった。かつてロシア隊や韓国隊も使ったことのあるルートだったが、古いロープを使って懸垂下降していたボロトフは、ロープが切れて墜死してしまった。

エヴェレストに久しぶりに登場した意欲的な2パーティは、こうして思わぬアクシデントで断念を余儀なくされた。公募隊育ちで、未熟なユマール登山者しか知らない若いシェルパたちが我がもの顔に振る舞うようになった最近の風潮が事件の根底にあると思われる。シェルパのルート工作が終わるまでは先に出ないという公募隊間の申し合わせはあるにせよ、実力ある者の自由な行動まで規制される状況は正常な登山と言えるだろうか。世界最高峰に公募隊が登場してから四半世紀、経済効果と引き換えにエヴェレストから失われたものは大きい。

さて、そのエヴェレストでは、この暴行事件のあと何事もなかったかのように登山が再開され、637名（暫定集計でネパール側467名、チベット側170名）が頂上に立ち、累計登頂者数は6,700を超えた。03年に70歳、08年に75歳で登頂を果たしている三浦雄一郎は5月23日頂上に立ち、80歳の最高齢記録を打ち立てた。

5年前に76歳で三浦の記録を上回ったミン・バハドゥル・シェルチャン（ネパール）は今回も最高齢記録を更新すべくやってくる予定だったが、ほとんどテントから出ず、シーズン終了間際に一度登高を試みただけで早々に断念してしまった。この攻撃前、たま

4. その他（平成25年度のトピック等）

たまひとりでテントにいた、軟禁状態のシェルチャンと会話を交わす機会があった日本人記者によれば、彼はなんの気負いもなく、ただ「私が登ったと言えれば政府はいつでも登頂証明書を出す」と語っていたという。思えば5年前、三浦の記録を破るために担ぎ出された感のあるシェルチャンだが、今回ばかりはうまく行かなかったようだ。

2. アンナプルナ南壁単独初登攀

全ヒマラヤを通じて最高の登攀が秋に行なわれた。ウエリ・シュテックがアンナプルナI峰（8,091メートル）南壁を初めて単独登攀したのである。10月8日から翌日にかけて、ABCからの標高差3,000メートル（取付のベルクシュルントから2,500メートル）の壁を28時間で往復してみせたのである。

アンナプルナ南壁は、1970年にクリス・ボニントンの英国隊が左手のバットレスから初登して「ヒマラヤ壁の時代」幕開けを告げたことで知られる。その後81年春に右手のバットレスがポーランド隊によって登られ（ザコパネ・バットレス）、同年秋にはイエティ同人隊が中央のラインを登った。さらに84年には、スペイン・ペアがザコパネ・バットレス右手のランペをアルパイン・スタイルで登っている。

シュテックが今回登ったのは、英国ルートとイエティ・ルートには含まれたクローワールをたどる新ルート。92年にフランスのピエール・ベジャンとジャン＝クリストフ・ラファイユが試みたラインで、このときはベジャンの墜死で未完に終わっていた。シュテックがこのラインに挑んだのは3回目だった。最初は07年春に単独登攀を試みたものの、頭部に落石を受けて300メートル滑落、雪の吹き溜まりに突っ込んで奇跡的に助かった。2回目は08年にジーモン・アンタマッテンと挑んだが、東稜で起きた遭難救助に赴いたことで機会を逸した。

今回は9月末に入山し、ドン・ボーウィ（カナダ）と6,100メートルを1回往復しただけで攻撃に踏み切った。結局ボーウィは、ロックバンドをフリーソロする自信がないとして断念、シュテックが単独で攻撃した。チリ雪崩を避けるため6,500メートルでビバークに入ったが、夜が明けて風が強まるのを懸念して1時間で切り上げ、夜間登攀を決意、翌日未明頂上に達した。春のエヴェレストでシェルパの暴行を受けて心身共に傷ついたシュテックにとっては、ヒマラヤに対する悪夢を振り払う一撃となった。

それから10日ほどたった18日、フランスのヤニック・グラジアーニとステファヌ・ブノワも同ルートを攻撃したが、こちらは降雪後の悪条件もあって1週間を要した。シュテックがロックバンドへとダイレクトに登ったのに対し、こちらはイエティ・ルートから入り、6,550メートルで3日間停滞。左へトラバースしてロックバンドを攻め、7,550メートルでビバークして24日頂上に抜け出した。ABCに戻ったのは2日後だった。すでに限界に達していた2人はまる1日かけてバッテリーを充電、衛星電話でヘリを呼んで救出された。

3. 6,000～7,000メートル峰の活況

カンチェンジュンガ山群で、チェコのマレク・ホレチェックとズデニェク・フルビーが5月にタルン・ピーク（7,439メートル）北北西ピラーを初登攀した。ホレチェックは2004年にピラーの右側から5,800メートルまで達していたが、今回はピラー下部に氷雪が付いていなかったため左手にラインを採り、15日登攀開始。5,900メートル、6,300メートルと2泊してヘッドウォールに突入、6,700メートルと7,000メートルでビバークを繰り返した末19日頂上に立った。帰路は西壁に採り、6,600メートルでもう1泊してからBCに帰った。

また青山学院大学隊（萩原浩司隊長）は10月、ジャンク・チュリ（旧名アウトライアー）東峰（約7,000メートル）に初登頂した。9月24日ブローケン氷河の5,200メートルにBCを置き、10月5日南西壁基部の5,800メートルにC2。9日6,500メートルにC3を出して10日萩原隊長と村上正幸、本田優城がネパール側スタッフ3人とともに頂上を目指したが、プラトー手前のミックス壁と頂上直下の岩稜で時間を食われたため6,800メートルで断念した。翌日、同じ6人で再度攻撃、12時30分頂上に立った。

韓国のアン・チヨン、オ・ヤンフン、キム・ヤンミもクーンブのアンプーI峰（6,840メートル）に初登頂した。12年秋に広島県岳連隊が試みたピークで、アンブ・ラブチャとバルンツェの間にある。イムジャ谷の5,350メートルにBCを置き、10日間で偵察と順応を済ませると10月8日に攻撃。南西壁左手のクーロワールから西稜に抜けるルートを探り。ビバーク1回で完登した。

キャジョ・リ（6,196メートル）ではロシアのウラディーミル・ベルソフとマリナ・コプテヴァが5月に東壁の新ルートに登った。東壁の氷雪部には05年アメリカ・ルートと09年イタリア隊の試登ラインがあるが、ロシア・ペアはその左手にあるロック・バットレスに登り、最後は東稜に出た。5月9日に5,100メートルから取付いて4ビバーク。13日に5,900メートルの最終ビバークから頂上を往復した。

コロンビアのカミロ・ロペスとアメリカ人女性アンナ・プファッフは10～11月、キャジョ・リの西面を囲む円形劇場に入り、その一角を成すルンガルツェ（6,070メートル）に初登頂した。マルルン（4,210メートル）をベースとし、4,800メートルにハイキャンプを出す。スケールを過小評価していたため700m登ったところで敗退。11月2日に再挙して、5,200メートルにもうひとつキャンプを設けてから3日目に完

登した。ルートは標高差1,200メートル、TD、AI4でコロンビアン・ダイレクトと命名した。

ロールワーリン／クーンブ境界では、アメリカのクリス・ライトとスコット・アダムソンがルーナク西峰（6,507メートル）とパンブク北峰（6,589メートル）に初登頂した。

ルーナクとはナンパ・ラへ続く交易路にある泊り場で、同名の氷河が西へナンパ氷河と分かれて国境稜線に食い込んでいる。国境は6,500メートル以上の峰を複数起こすがすべて未踏。わずかに東へ張りだした尾根の先にあるジョボ・リンジャン（6,778メートル）が09年に登られただけである。当時頂上に立ったアメリカの故ジョー・ピュリヤーは、デイヴィッド・ゴットリーブとその頂上に2泊して最高峰のルーナク・リ（6,805メートル）を狙ったが、険悪な稜線に阻まれていた。

ライトとアダムソンは10月20日、降ったばかりの新雪を6キロにわたって漕いでABCに到達。1日休養後南西壁のクーロワールを登って真夜中に登頂、往復24時間でABCに戻った。ルート名はオープン・ファイア（1,000メートル、WI5、M3）。1週間後2人は再びABCに上がり、パンブク北峰に向かった。09年のスイス＝フランス隊（ステファヌ・シャフテール隊長）が登って、スポンサー（スイスの高級時計メーカー）の名を付けたピークだが、北東壁をビバーク1回で登ったペアの調査によれば、どうやら彼らは下方のリッジから引き返していたらしい。

また、ピュリヤーの遺志を継いだゴットリーブはチャド・ケログとルーナク・リを目指し、12年に続く挑戦を行なったものの、凍傷にかかったため取付きから1,000メートル登っただけで断念した。

テンカンポチェ（6,487メートル）では、マリナ・コプテヴァ、ガリナ・チビトク、アナスタシア・ペトロヴァのロシア人女性トリオが北壁中央ピラーに

4. その他（平成25年度のトピック等）

挑んだ。2008年に北西壁がスイス隊に、北東壁が日本隊（岡田康、馬目弘仁）によって登られているが、中央ピラーは06年にカナダ隊がカプセル・スタイルで5,800メートルまで登っただけだった。女性隊もカプセル・スタイルを採用したが、途中から北東壁へトラバース、10月10日に頂上を往復した。固定ロープ終点から下降を含めて52時間を要した。

ドイツ人女性イネス・パペルトは11月にピグフェラゴ東峰（リクー・チュリ I 峰、6,718メートル）に登った。調査の結果、1960年のセシル・バルベザ（仏）とナワン・ドルジが西稜から西峰までしか行っていなかったことが判明したので、こちらが初登頂となった。当初はスイスのトーマス・ゼンフとテンカンボチェを狙ったものだが、氷雪の付着が不足していたのでこの山に変更。頂上攻撃はパペルトが単独で行ない、11～13日で登頂した。

フランスのピエール・ラブルら4人はガウリシャンカール（7,134メートル）南壁中央部を初登攀したものの、壁を抜けた地点から下降した。ラブル以下マチュー・デトリ、マチュー・メイナディエ、ジェローム・パラは10月21日に登りはじめ、3日間で南壁を抜け出して6,900メートルに達した。南峰（7,010メートル）まではまだ距離を残していたが4人はここで下降を選択した。85年の日本隊（酒井健作、大泉剛）もほぼ同じラインを試みたが、6,100メートル付近から敗退する途中、酒井隊長の転落死で終わっていた。

ルーマニアのコスミン・アンドロンとクリスティナ・ポガセアンは5月、アンナプルナ山群のガンダルヴァ・チュリ（J・O・M・ロバーツのガーベルホルン、6,248メートル）に初登頂した。1956年にマチャプチャレ偵察に入ったロバーツが、アルプスの名峰になぞらえて命名したものである。未踏峰なのでネパール側8人と合同で入山したが、登山活動は独自

に行なった。5月5日、南西支稜に取付き、5,438メートルでビバーク。翌日5,586メートルでもう1泊し、6日に頂上を陥れた。なお、近くの聖山マチャプチャレにならば、頂上は踏まずにその直下から引き返した。GPS高度は6,302メートルだった。

イギリスのデイヴィッド・チャップマン、ニール・ウォーレン、ガイ・ウィルソンは11月に西ネパールのチャンディ・ヒマールに向かった。最高峰は6,142メートルだが、ネパール山岳協会（NMA）はその西にある6,069メートル峰をチャンディ・ヒマールとしている。シミコットから6日間のトレックで4,950メートルにBCを設け、6,142メートル峰へのルートをさぐったが、NMAのいうチャンディ・ヒマールに変更、スノードーム（6,024メートル）とのコル（5,950メートル）に出た。6,069メートル峰へのルートは脆い岩稜に阻まれ、チャップマンとウィルソンがスノードームに立つだけで終わった。

【インド】

インドでは、キシウトワール・カイラス（6,451メートル）にイギリスのミック・ファウラーとポール・ラムズデンが初登頂した。ファウラーが1993年にゼロ・キシウトワール（6,200メートル）に初登頂したときから注目してきた山だが、カシミールの政情不安で20年近くアクセスが許されなかった。わずかに11年、ダヴィット・ラマらのオーストリア＝スイス隊が同峰の第2登を果たし、GPSで高度を測って6,155メートルとした。機が熟したとみたファウラーは13年秋の許可を取得し、長年の友ポール・ラムズデンと挑んだ。ダルラン・ナラのアプローチは久しく登山隊が入っていないため荒れており、チョモチオール・ナラの4,100メートルにBCを設けたのは英国を出てから8日目のことだった。登攀ルートは南西壁に

採り、6日間で頂上に立ったが、北面ヘトラバースするのは諦めて登路を下降した。

東部カラコルムでは7月、デブラジ・ダッタ隊長のインド隊がプラトー・ピーク(7,287メートル)に、ヴィクター・サンダーズ隊長の英国隊がチャムセン(7,017メートル)にそれぞれ初登頂した。

サセール・カンリI峰(7,673メートル)の南に位置するプラトー・ピークは、南ブクポチェ氷河から西稜が数回試みられ、09年にはアメリカ=インド合同隊がサカン・ルンパ氷河から南壁の6,600メートルに達していた。ダッタ隊長ら9人は7月、4,750メートルにBCを設け、西稜に4つのキャンプを進めて31日に全員が頂上に立った。一方英国隊はサカン・ルンパ氷河にBCを置き、北シュクパ・クンチャン氷河に入った。5,600メートルにハイキャンプを出すのが、8月15日雪崩に襲われてアンディ・パーキンがテントごとクレバスに転落、背中を負傷して歩行困難になった。パーキンがヘリで救出されたあと、サンダーズはスーザン・ジェンセンと近くのチャムセンに向かい、6,000メートルと6,500メートルに泊まって21日に西稜から登頂した。

【パキスタン】

1. ブロード・ピーク冬季初登頂

8,000メートル峰の冬季登頂は、前年までに11座が登られ、残るはK2(8,611メートル)など、いずれもパキスタンにある3座となっていた。12年12月から翌年3月にかけてのシーズンはナンガ・パルバット(8,126メートル)に4隊が挑んで敗退。ブロード・ピーク(8,051メートル)のポーランド隊だけが冬季初登頂に成功したが、頂上に立ったアダム・ビエレッツキら4人のうちマチェイ・ベルベカとトマシュ・コヴァルスキが下山中に消息を絶ってしまった。ナ

ンガ・パルバットでも、単独登頂を試みたフランスのジョエル・ビシネフスキが行方不明になった。南壁(南南東側稜)は雪が少ないので南東稜に向かう、と発信したのが最後だった。彼の遺体は9月になって雪が解けたあと、6,100mの斜面で発見された。

冬季ヒマラヤ登山のベテラン、クシストフ・ヴィエリツキ隊長(62)以下5人のポーランド隊は、シムシャル谷から高所ポーター3人を加えた8人編成でブロード・ピーク西稜に挑んだ。寒波の影響でBC入りが遅れたものの、大半の物資は前年秋のうちに荷揚げしておいたので、BC建設はすみやかに終えた。

1月23日からルート工作にとりかかり、2月16日にはC3(7,150メートル)に達したが、頂上攻撃は7,820メートルでクレバスに阻まれた。

次のチャンスは3月初めに訪れた。アダム・ビエレッツキ、アルトゥール・マウエク、マチェイ・ベルベカ、トマシュ・コヴァルスキは3月4日C4(7,400メートル)に泊まり、翌日頂上に向かった。12時30分、7,890メートルで稜線のコルに飛び出したが、前衛峰(ロッキー・サミットと通称される8,027メートル峰)までの岩稜で予想外に時間を取られ、午後4時になってその頂上に達した。ここからほぼ水平の稜線を進んで、ビエレッツキが5時20分、マウエクが同50分、ベルベカとコヴァルスキはさらに10分遅れて頂上に立った。後続を待つことなく下降に移った4人はバラバラになり、ビエレッツキは午後10時10分、マウエクは翌日午前2時にC4に帰ったが、ベルベカとコヴァルスキはついに帰着しなかった。

唯一無線機を持っていたコヴァルスキがコルに戻ったとBCにコンタクトしてきたのは、登頂から12時間も過ぎてからのことだった。結局、2人とも以後消息を絶ってしまい、高所ポーターによる捜索も無為に帰した。カラコルムで3座目の冬季初登頂は、こうして悲劇のうちに幕を閉じた。

4. その他（平成25年度のトピック等）

なお、マチェイの弟ヤーツェクは、兄たちの遺体を収容するべく4人チームを編成して西稜に向かった。7月初め、最初に頂上を攻撃したドイツのアミカルアルピン隊（トーマス・レームレ隊長）により7,900メートル地点で遺体発見の報がもたらされた。これはコヴァルススキのものだと判り、一行は凍り付いた遺体をルートから離れた場所まで運んで埋葬した。もうひとりのマチェイ・ベルベカは7,700メートル付近の深いクレバスに転落したものと推測されたが、現場まで到達することができずに収容を断念した。

2. ナンガBCのテロリスト

6月22日、ナンガ・パルバットのBCで起きた事件はエヴェレストの不祥事より深刻で、登山界に大きな衝撃を与えた。深夜、武装集団十数人がディアミール谷BCを襲い、居合わせた登山者を次々に殺害したのである。犠牲者はウクライナと中国が3人ずつ、スロヴァキアが2人、リトアニアが1人、中国隊のネパール人シェルパと現地スタッフのパキスタン人の合計11人にのぼった。テロリストたちは寝ていた登山者をテントから引っ張りだし、パスポートや金品を奪ったうえで射殺した。暗闇を利用して逃げた中国人登山者の通報を受けたパキスタン陸軍兵士が翌早朝に急派されたが、犯人はすでに退去したあとだった。犠牲者のなかにアメリカ人はいなかったが、犯人の1人が「ビン・ラーディンの仇」と口走ったという情報も流れ、近隣の山に向かっていたアメリカ隊のなかには、身の危険を感じて登山を中止し、帰国したメンバーも少なくなかった。

パキスタン・タリバン運動（TTP）は声明を発し、襲撃は前月に米軍の無人機攻撃で同派幹部が殺害されたことへの報復だと述べた。さらに事件から40日後、犯人捜査と地区の治安回復のために派遣された警察幹部の車列がディアミール谷入口のチラスで銃

撃され、3人が死亡した。

一方、マリウス・ガネ隊長ら5人のルーマニア隊は7月初めに入国して76年南西稜ルートを目ざし、事件の起きたころにはマゼノ・ギャップへのルート工作と順応行動を終えていた。事態の推移を見るため1週間ほど待機したあとで、ルパール側は安全だと当局のお墨付きが出たので登山を再開した。最初の攻撃は7月第1週に行なわれたが、強風のためC4（7,200メートル）で断念。2回目は12日に開始したが、ブルーノ・アダムチェックが途中で脱落。残る4人が18日にC5（7,500メートル）を設けて翌日頂上を攻撃し、午前1時に出発したガネ隊長から3時間遅れて他の3人も頂上を目ざし、隊長に続いてアウレル・サラサン、ゾルト・トロック、テオ・ヴラドも順次登頂に成功した。言うまでもないが、これが唯一の登頂成功となった。

3. バルトロ氷河の8,000メートル峰

ナンガ・パルバットとは異なって、山深いバルトロ氷河にはテロリストの脅威は及ばなかった。今季のK2には栃木隊（北村誠一隊長ら8人）を含む7隊約40人が南東稜から頂上を目ざした。しかし積雪状態は最悪で、7月25日に各隊そろって上部をうかがったものの、先導するシェルパたちがC3（7,200メートル）までたどり着けなかったため、いったんC2（6,700メートル）から退却した。

ところが、ブロード・ピーク父子登頂の余勢を駆ったニュージーランドのガイド、マーティ・シュミット（53）は、息子のデナリ（25）とともにC3を目ざして登高を継続、その夜キャンプに到達したと連絡したきり翌朝から消息を絶ってしまった。その後、捜索に派遣されたシェルパがC3の破壊されたテントを確認、幅400メートルに及ぶ雪崩の跡とシュミット父子のものと思われるアックスやクランポンを発見した。

父子がC3から先に進まなかったことは明らかで、おそらく就寝中に雪崩に埋められたものと思われる。

ブロード・ピークでは通常ルートからの登頂が繰り返されるなか、イラン隊が南西面のバリエーションから登頂を試みた。94年に、のちに14座登頂者となるカルロス・カルソリオ（メキシコ）が単独登攀した南南西支稜をたどるもので、C3（6,800メートル）付近で西稜通常ルートに合流する。カルソリオはここで悪天候のためいったん下山し、数日後に戻ってきて上部を登った。ここから右へ分かれ、前衛峰西壁を直登するラインである。ルート下部は、09年にフランスのリュドヴィク・ジャンビアージュとエリザベート・ルヴォルがアルパイン・スタイルで試みている。彼らは2日間で支稜の稜線に出たが、シーズン初めで積雪が多かったため引き返した。その直後、イランのアラシュ登山クラブ隊もここを試みた。カルソリオが支稜の側壁をたどったのに対し、もっぱら稜線伝いに固定ロープを伸ばし、通常ルートに合して7,000メートル付近で断念した。

今回のイラン隊は5人の編成で、アイディン・ボゾルギ、プヤ・ケイヴァン、モイタバ・ジャラヒの3人が7月13日に前衛峰西壁の7,350メートルでビバークした。翌日はけわしい岩壁帯で100mしかかせげず、15日8,000メートルに達して3度目のビバーク、16日に主峰頂上を往復した。ところが、通常ルートを下るつもりが稜線はずして西壁側に迷い込んだらしく、7,700メートル付近で立ち往生してしまった。彼らの正確な位置が分からないため通常ルートに派遣された高所ポーターの捜索は空振りに終わった。ボゾルギとの連絡は数日間保たれていたが、やがてそれも尽きた。のちに捜索した高所ポーター2人が主峰頂上でイラン国旗を発見、彼らの登頂が証明されたが、ルート上に3人の姿を見つけることはできなかった。

ガッシャブルム I 峰（8,068メートル）でも3件の遭難があり、5人の命が失われた。1987年にイエジ・ククチカとアンナプルナ冬季初登頂を果たしたアルトゥール・ハイゼル（51）はマルチン・カチカンと2人、ガッシャブルム I 峰と II 峰の継続登攀を企図して入山した。7月6日、北面クーロワールのC3（7,350メートル）から I 峰を攻撃したが、強風のため7,600メートル付近からC3まで引き返し、そのまま下降を続けるとBCを守るパキスタン人コックに伝えてきた。ところが、その直後にハイゼルが滑落、カチカンはC2（6,400メートル）まで帰ることができたが、ハイゼルはのちに遺体となって発見された。

アルバロ・パレデス隊長のスペイン公募隊からは隊長自身とセビ・ゴメス、アベル・アロンソが7月21日に登頂した。この日頂上直下から引き返したアルフレド・ガルシアとダビド・ロペスは一時消息が途絶えて心配されたが、2人とも無事に下山した。ところが、頂上に立った3人はC2付近まで降りてきたところで消息を絶ち、数日間にわたった捜索でも手がかりが得られなかった。

チェコのマレク・ホレチェックとズデニェク・フルビーは南西壁に新ルートを求めたが果たさず、8月2日に下降する途中フルビーが滑落死してしまった。同隊に所属するマルケム・ノヴォトニとトマシエム・ペトレチケンが7月28日に北面クーロワールから頂上に立った。

4. K6西峰とクンヤン・チッシュ東峰

カナダのラファエル・スロウインスキとイアン・ウェルステッドはチャラクサ氷河のK6西峰（7,040メートル）に北西壁から初登頂した。テロ事件当時は3人でカラコルム・ハイウェイをスカルドへ向かっていたが、道路が閉鎖されたためいったんイスラマバードまで引き返した。アメリカ人のジェシー・ヒュー

4. その他（平成25年度のトピック等）

イはそのまま帰国したが、カナダの2人は空路スカルドへ飛んで遠征を続行。北西壁を4日間で登って、7月29日頂上に立った。

彼らの直前、7月5日から同じルートに挑んだ日本隊（今井健司、宮城公博、中島健郎）は、6日目に6,400メートルに達したところで悪天候に阻まれ、惜しくも初登頂を逃した。天候がカナダ隊に味方したことは事実だが、もうひとつ見逃せないのは、急峻な壁面でも容易に人工テラスが作れるビバークシートを持参していたことである。2011年にインドのサセール・カンリⅡ峰でアメリカのマーク・リチーらが駆使したもので、ナイロンシートを斜面の谷側に固定し、そこに雪を詰めて、氷壁をカットするより容易にテントのための小テラスを作るものだ。このような登攀においては、ビバーク技術の巧拙も重要なファクターとなる。

イギリスのアンディ・ハウスマンとジョナサン・グリフィスは、カナダ・ペアが頂上に立った翌日にチャラクサ氷河のBCに入った。目標は、昨年グリフィスが試みたリンク・サール（7,041メートル）北壁だが、K6西峰も視野に入れていた。しかし、観察したところ、想定していた2本のラインはセラック崩壊の危険にさらされており、唯一安全なラインはカナダ・ペアの採ったものしかないことが分かった。とりあえずリンク・サールを目標に順応行動に入ったが、結局登頂は失敗に終わった。

ポルトガルのパウロ・ロホとダニエラ・テシェイラが初めてナンマ谷側からルートを拓いてカブラ南峰（約6,350メートル）に初登頂した。2人は8月25日～27日の偵察で南西側稜にルートを見出し、5,700メートルの科尔まで試登して装備をデポした。しばし悪天候をやり過ごしたあと、9月5日にBCを出、翌日暗いうちに登りはじめて科尔にテントを建てた。7日は午前1時半に出て、傾斜60～65度の氷壁を行

く。角度はゆるいが、先週降った雪が薄く覆っているので、ずっと確保しながら進んだ。予想外に時間を食われたがそのまま続行、午後6時ようやく南峰頂上を踏んだ。科尔に帰ったのは翌朝3時15分、往復25時間45分だった。

カブラ主峰（6,544メートル）は04年にスティーヴ・ハウス、マルコ・プレゼリらが初登頂し、09年にはチェコのマレク・ホレチェックとヤン・ドウドレブスキがWild Wingsを登っている。いずれもチャラクサ氷河側からのルートである。

ハンスイェルク・アウアーら3人のオーストリア＝スイス隊はヒスパー氷河のクンヤン・チッシュ東峰（7,431メートル）に初登頂した。2003年にポーランドのグシェゴシ・スコレクらが南西壁の6,700メートルに到達。06年にはスティーヴ・ハウスとヴィンス・アンダーソンが頂上手前300mで断念していたピークで、山川剛司、谷口けい、長門敬明のトリオも09年に6,100メートルまで達していた。

6月25日に攻撃したアウアーとジーモン・アンタマッテンは3日間で7,000メートルに迫ったが、嵐に遭って退却した。出発前に指を負傷して順応が遅れていたマティアス・アンタマッテン（ジーモンの兄）もなんとか追いつき、7月14日の攻撃に間にあった。3人は2日間で6,600メートルまで登るが、16日に天候が悪化、チリ雪崩を避けるためわずか100m登ったところでクレバスに避難し、翌日1日停滞を余儀なくされた。しかし、18日には天候が回復、青空の下、昼過ぎに頂上を陥れた。ハウスが言っていた稜線上のステップはさして難しくはなかったというが、氷雪壁に対する備えの差によるものと思われる。

5. バルトロ、ビアフォ岩塔群

グレート・トランゴ（6,286メートル）ではポーランドのマレク・ラガノヴィッチとマルチン・トマシェ

フスキが北西壁の右寄りをたどる新ルートを20日間のカプセル・スタイルで登った。上部3ピッチは04年アジーム・リッジに合流、嵐のなかだったので南西峰頂上(6,250メートル)まで行かずに引き返した。1,960メートル46ピッチ、VII+, A4。ビレイボルト21本とプロテクション用にリヴェット8本を使用した。

ネームレス・タワー(6,239メートル)では、ロシアのエフゲニー・バシキルツェフとデニス・ヴェレテニンが南西壁の89年スペイン・ルートを登った。ジョー・ブラウンの76年初登ルートを狙ったが、出だしのコーナーが氷柱落下の危険にさらされていたため変更し、2日間で頂上に立った。ロシア・ペアは引き続いてウリピアホ・タワー(6,109メートル)東壁に7日間かけて新ルートを拓いた。79年にジョン・ロスケリー、ロン・カウクラのアメリカ隊が東壁から初登したルートと一部ピッチを共有しながらその左手を直上するもので、26ピッチ、6c+, A2。

イタリア「レッコの蜘蛛」のマッテオ・デラ・ボルデッラとルカ・シエラは、スイスのジルヴァン・シュープバッハと7月21日に西壁を初登攀した。この岩峰では、88年にマウリツィオ・ジョルダーニらのイタリア隊が南稜を登っている。デラ・ボルデッラらは、まず南稜の左をたどる新ルートをアルパイン・スタイルで試みたが、2日間登ったところで断念、西壁に目標を転じた。わずかな休養をとっただけでデリケートなアプローチ(傾斜75度)を克服したトリオは、7月21日頂上に立ち、2日後BCに帰着した。この西壁ルートは18ピッチで最高5.10のフリー、氷のピッチで若干のエイドを使用した。

スペインのアルベルト・イニエラテギ、フアン・バレホ、ミケル・サバルサがパユ(パユ、6,601メートル)南壁中央ピラーの初登攀を狙って7月初めにBCを設けた。ピラーの頭は約6,000メートルで、頂上まではさらに600メートルの標高差を残す。カプ

セル・スタイルで攻撃したトリオは下部岩壁を突破し、5日目にはランペ状になった第2雪田(約5,500メートル)まで進んだ。しかし、そこで連続20時間に及ぶ降雪に遭遇、天候回復の見込みもないため、傾斜が増してくるピラー上半部を残して断念した。

1892年にピアフォ氷河を探検した英国のマーティン・コンウェイは、氷河に面してそびえる目立つ岩峰をオーガ(人食い鬼)と呼んだ。その後この名前は、もっと奥にあるバインター・ブラックに与えられたが、じつはコンウェイのキャンプ地からはこの山が見えなかったはずなのである。というわけで、ウズン・ブラック(6,422メートル)は「コンウェイのオーガ」という別名で呼ばれるようになった。ヴィクター・サンダーズの英国隊が初めて80年に東壁を、ジム・ドニニの米国隊が93年に南西壁をそれぞれ試みたものの、この元祖オーガは未踏でありつづけた。

チェコのオンドラ・マンドゥラとイジ・プリスカは、ドニニのパートナーだったジャック・タックルから情報を仕入れて南西壁に向かったが、巨大なセラックにおびやかされているのを見て、傾斜はきついが岩が主体となる西ピラーに目標を定めた。北西面を斜上する雪のクローラールを経てピラーに出たペアは、3日間でこれを登攀、At the Right Time in the Right Place(1,600メートル、6b M5 A1)とした。最初の400メートルをフリーソロしたあと35ピッチを確保して登ったが、エイドを使ったのはわずか10メートルの区間だけだった。荷揚げはしたがユマールは使わず、リードもフォローも大部分フリークライムした。

【天山山脈】

中国・新疆とキルギスタンの国境を成すコクシャアル・タウ山脈は最高峰ポベーダから西へ延びて高

4. その他（平成25年度のトピック等）

度を下げ、魅力的なピークを起こしている。その中のひとつキジル・アスケル（5,842メートル）は1985年、カズベク・ワリエフのカザフ隊によって西壁から北稜を経て初登された。標高差1,300メートルを誇る急峻な南東ピラーは、07年にアレクサンドル・オディンツォフのロシア・ビッグウォール・プロジェクトの一環として固定ロープを駆使して登られた。

ベルギーのニコラ・ファヴレスはセアン・ヴィラヌーヴァ、ステファヌ・ハンセンにフランスからエヴラール・ヴェンデンボームを加えて、このピラーを新ルートからフリー化しようと訪れた。一行はロシア隊が右へ迂回した下部ピラーを直上し、3カ所のポータレッジキャンプをしつらえてほぼその左手にそってルートを伸ばした。上部3分の1はロシア・ルートをたどって、15日後の9月22日、頂上に立った。岩壁部は6a～7b、最後の400メートルはM7～M8のミックスだった。山は比較的標高があって高緯度に位置し、しかも季節は秋とあって一行の敵は寒気だった。夜はマイナス15℃まで下がり、昼間の晴天時でも日陰の気温がプラスになることはなかった。ロックシューズで行動するため多少の凍傷はまぬがれず、これまでパタゴニア、カラコルム、カナダ北極圏などでビッグウォール・フリーを経験してきたファヴレスらにとっても「最もつらい体験だった」という。

【アルプス】

アイガー（3,970メートル）北壁ハーリン・ダイレクトとメタノイア（ジェフ・ロウがソロで開拓）の間に、06年冬にロシア隊（ドミトリエンコ＝アリヒポフ＝マリギン＝ツィガノフ）が拓いたルート（52ピッチ、A5）があるが、再登されたことがない。イギリスのアンディ・カークパトリックとロス・ケイ

ン、ニール・チェルトンは3月初めにこれを試みた。装備も食料も十分だったが、20ピッチ登って核心のA5ピッチにとりかかったところで気温が上昇、激しい落石に追われて下降を余儀なくされた。カークパトリックは「この手のブランクラインとしては最小限のボルトしかなく、何カ所かのビレイは最大10個のギアを組み合わせで行なった」と語っている。

8月2日、ロベルト・ヤスパー（独）とロジェ・シェーリ（スイス）がギリニ＝ピオラ直登ルートのフリー初登に成功した。83年にルネ・ギリニとミシェル・ピオラが5日間を費やして拓いたこのルートは頂上まで抜けていないが、北壁のうち最も急峻な部分をたどるもので、もっぱら岩壁部に行く標高差1,400メートル（ABO一、6a A4）。この2人は06年夏にほとんどのピッチをフリーで登り2日半かけて終了点に抜けたが、レッドポイントは成らなかった。今回は14時間のチームフリーで完登し、IX/7cのグレードを与えた。

ヤスパーとシェーリは09年に日本直登ルート1969、10年にハーリン・ダイレクト1966をフリーで登っており、今回の成功でアイガー北壁に刻まれた三大エイドルートのフリー化を果たした。

【アラスカ／カナダ】

1. ルース氷河とその周辺

バックスキン氷河に向かって薙ぎ落ちるムースズ・トゥース（3,150メートル）東壁で、4月中旬の10日間のうちに3本の新ルートが刻まれた。

スコット・アダムソンとピート・タブリーはアークティック・レイジ（04年、ギルモア＝マホニー）の右手をたどり、上部数ピッチで合流するNWS（1,400メートル、アラスカグレードV、AI6 M5）を拓いた。東壁初のオールフリールートである。アダムソ

ンは08年と10年にもこのラインを試みていたが、今回は好条件にめぐまれ、ベルクシュレントから往復34時間半の4月14日に終えた。

ジェフ・アンガーとクリス・ライトも同じラインを目標にやってきたが、アダムソンらに取り付いているのを見て左手のラインに変更した。4月12日から13日の試みは、しかし中段にある一連のコーナーで敗退。アンガーが肘を負傷してしまったので、諦めきれないライトはアダムソンに声をかけた。NWSを登って過去最高の氷のコンディションであることを知ったアダムソンは快諾、18日早朝に出だしの氷壁を同時登攀しはじめ、8時半にはアンガーとライトがビバークしたヘッドウォールに着いた。2人は14時間かけて突破し、雪の肩でビバークしたが、ここは81年に東壁を初登攀したジム・ブリッドウェルとマッグズ・スタンプがビバークしたのと同じ地点だった。翌日ヘッドウォールの頭でビバークした2人は3日目の午後3時、頂上に達した。下降はNWSに採り、アダムソンとタブリーがセットしていたVスレッドを利用した。ルート名はテラー (1,500メートル、アラスカグレードVI、WI6 M7R/X A2)。

オーストリアのダヴィット・ラマとスイスのダニ・アーノルトもバックスキン氷河にやってきた。目標はとくに決めていなかったが、東壁を観察してたちまちラインの目途を付けた。アークティック・レイジの左手に続く切れぎれのラインから上部のロック・バットレスにつなげようというのだ。初日は80度～90度の氷壁をたどり、さらに難しい9ピッチをこなした。翌日はビバーク装備をそこに残し、頂上へと速攻をかけた。26ピッチ登って頂上雪原に出たが、最高点は踏まずにビバーク地まで戻るほうを選択した。ルート名はBird of Prey (猛禽、1,500メートル、5.10 A2 M7+)。

ガーゴイルでは、オーストリアのアレクサンダー・

ブリュメルとゲリー・フィーグルがBeauty and the Beast (650メートル、7a+ A3) を初登した。5月19日に入山した当初は雪が多く、雪崩や落氷に悩まされた。しかし、下旬になってクラックとコーナーを結んでガーゴイルに至るラインを発見、2日間で完登し、29日頂上に立った。数日後、エイドで登った下部3ピッチを登りなおし、核心のA3ピッチ30mを除いてフリールートとした。2人はさらに、高気圧の張り出しに乗じてムースズ・トゥースのトラバースに挑んだ。6月6日夜10時に出発して10日朝9時BCに帰着。トータル83時間で、前年のオズタークとウィルキンソンに次ぐ第2登に成功した。

ピーター・ドゥセットとサイラス・ロッシが、前年の降雪と春の寒気がもたらした氷のスメアを利用してマウント・ジョンソン (2,579メートル) 東壁に新ルートを開いた。4月10日、ルース氷河に飛んだ2人は、あまりの寒さに10日待ってから、7,500フィートの支峰 (2,286メートル) へと向かった。2007年にギリギリボーイズ隊が登ったThe Ladder Tubeの1ピッチ目を登ってから右へ出て新ルートに入る。3分の2のところにある核心 (WI6R/X) の直下でビバークし、翌日これを突破。支峰頂上とジョンソンの間には、エレベーターシャフトの深いクローラールがあるので、ジョンソン頂上までの縦走は割愛して下降に移った。ルート名はTwisted Stair (アラスカグレードV、700メートル、WI6R/X M6+)。

トッド・トゥモロとダスティ・イーローが4月下旬、めったに登られたことのないブラッドリー (2,774メートル) 北壁にNeve Ruse (1,220メートル、V AI5R/X) を開いた。取り付く前に降雪があったため26日まで待ち、3時間半かけて北壁基部に出た。一時は敗退も考えたほど難しい雪壁を登り詰め、クラックの氷を掻きだしながらプロテクションをとってコーナーをたどり、真夜中過ぎに難所を終えてビバーク。

4. その他（平成25年度のトピック等）

3時間眠っただけで翌日午後1時頂上に立ち、西稜をウェイクとのコルへと下った。往復39時間の登攀だった。なお北壁には、2005年にカナダのルイ＝フィリップ・メナールとマクシム・トゥルジョンが登ったSpice Factory (5.10R WI5 M7) があるだけだった。

トゥモロは5月6日にもジョシュ・ホーシェンと組んで、ジョンソン東壁にThe Fine Escape (V, AI4 5.6) を拓いた。ジ・エスカレーターを約500メートルたどってから右へと分かれ、残り700メートルを頂上まで抜けるラインである。

2. キチャトナおよびリヴェレーション山塊

キチャトナ山群のシタデル (2,597メートル) ではベン・アードマン、ジェス・ロスケリー (米) とクリストファー・シーラス (デンマーク) が4月5日～7日、東壁で新ルートに登った。当初の計画では、マイク・ターナーがスー・マカリー、オリー・サンダーズと03年に登ったSuper Dupa Couloir (ED4, 1,130メートル, WI6+) の再登だったが、ターナーから得た情報で、その左にある未踏のクローワールを目ざすことにした。シャドウズ氷河に飛んで12時間後の5日深夜、一行は東壁に取り付いた。出だしの氷雪壁から傾斜のきつい一連のコーナー (AI5+ M6+) を越えてビバーク。翌日も南東稜のコルへ向けて直上し、最後はアードマンがA3と5.10Rのピッチで締めくくった。コルからは南東稜をたどり、頂上まで一投足の地点でビバーク、翌日北稜を下った。ルート名はターナーのルートをもじってHypa Zypa Couloir (アラスカグレードVI, 1,130メートル, 5.10R A3 AI5+ M6+) となった。

リヴェレーション山塊のアポカリプス (2,848メートル) は1967年に試登したデイヴィッド・ロバーツが命名した山で、山塊のなかでは珍しく何回もトラ

イされてきた。最近この地で活動しているクリント・ヘランダーがジェイソン・スタッキーと4月初めに初登頂した。ヘランダーは、前年失敗したピラミッド・ピークをロン・ブレイシャーと試みたが、ハングした雪庇に行き詰まったうえ、ブレイシャーの日数切れで敗退。アンカレジで悪天候をやり過ごし、あらためてスタッキーとリヴェレーション氷河に入山した。2人はアポカリプスをやることに決し、西壁に取り付いた。Z字を描く雪田の右手に続く微妙なラインをビバーク2回で登り切ったが、クローワールのなかで、ほとんど壁面にくっついていない氷を登らされたという。ルート名はA Cold Day in Hell (1,340メートル, AI5)。

カラコルムのタフルタム (6,651メートル) に挑むつもりだったスコット・ベネットとグレアム・ジーマーマンは、ナンガ・パルバットのテロ事件を聞いてリヴェレーション山塊に目標を変えた。7月12日の出発に先立ってこの地の精通者クリント・ヘランダーの意見を参考にして、目標をジ・エンジェル (2,822メートル) の東バットレスに定めた。この山塊では、氷雪やミックスの記録は多いが、夏場のロッククライミングについては情報が乏しい。また、時季が進んでスキーを装着した軽飛行機では氷河に着陸できないので、R44ヘリに頼らざるを得なかった。(デナリ国立公園内ではヘリが使えないが、リヴェレーション山塊は公園の範囲から外れている)

ヘリは東バットレスの真下に2人を降ろし、さっそく13日に登攀を開始した。クラックやコーナーに恵まれた花崗岩壁を上限5.10までのフリーで登る。稜線に出てテントを張り、数時間休憩。白夜を利用して残る500メートルのクラシックなリッジをたどると、85年に登られた南東バットレスのルートに合流して頂上に立った。

3. カナディアン・ロッキー

第3の高峰ノース・トゥイン (3,719メートル) の北峰がトゥインズ・タワー (3,627メートル) である。ジョン・ウォルシュとジョシュ・ウォートンが1,500メートルを超える北壁の85年ルート (バリー・ブランチャードとデイヴ・チーズモンドのノース・ピラー、5.10d A2) を第2登した。

ロイド・マッケイ小屋に着いた2人は、2年前にウォートンがデポしておいた食糧がだれかに食べられてしまったのを発見した。もともとライト&ファストで挑むつもりだった2人は「もっと軽くもっと素早く」登るしかなくなった。翌日から登りはじめ、ゆるんだ岩に苦労しながらも4日目の9月12日午後4時、頂上に立った。ウォルシュの付けたグレードは5.11bR/X、約4メートルのA1が入っている。この登攀はノース・トゥイン北壁全体では第4登にあたり、74年のジョージ・ロウとクリス・ジョーンズ (5.10 A3)、85年のブランチャードとチーズモンド、04年のスティーヴ・ハウスとマルコ・プレゼリに続くものである。

【南米大陸】

1. ペルー・アンデス

山野井泰史と野田賢のペアが6月にワイワッシュ山群で3つの登攀に成功した。まず6月5日、ブランカ山群のピラミデ (5,885メートル) 南西壁を往復18時間で登って順応したあとワイワッシュに移って12日、4,350メートルにBCを置いた。

目標のプスカントウルパ・エステ (5,410メートル) は、07年にスロヴェニアのパヴレ・コジエクが登った東壁 (ストーン・ヘンジ) の左手に展開する南東壁を15~16日、5,300メートルでのビバーク1回で初登攀、頂上の通算第4登を果たした。引き続いて23~

24日、トラペシオ (5,653メートル) 南壁の右クローワールを登ったが、初登だと思ったこのルートは、06年にスペインのホセ・マヌエル・フェルナンデスとミゲル・アンヘル・ピタによって登られていたことが分かった。この2人は頂上まで行かずに行ったん降りたが、4回目の懸垂でアンカーが抜けてフェルナンデスがロープもろとも転落死。残されたピタは、雪のレッジで12時間過ごしたあと生き残るため頂上まで完登、北西面へ降りたのだという。

2. パタゴニア2012/13補遺

2012/13年シーズンの成果についてはVol.28にすでに書いた。以下は、そこから洩れていたシーズン後半の記録である。

スペインのペドロ・シフエンテスが3度目の正直でパイネ岩塔群 (トーレス・デル・パイネ) の完全単独縦走に挑み、1月から2月の29日間を要して成功した。シフエンテスは2011年にアドリアン・アイリョと、12年には単独で挑んで失敗していた。

今回は45kgのザックを荷揚げしながらトーレ・ノルテ (北塔) 北稜のエスピリト・リブレ (500メートル、5.11 A1) を登ってノルテ前衛峰に立ち、100メートルのギャップを越えて主峰に到達。モンツィーノ・ルートを下降して中央塔とのコルに出、ボニントン=ウィランズ・ルートの1ピッチ目をフィックスした。中央塔に立ったのは1月24日で、翌日カーニー=ナイト・ルートから南塔とのコルに下降した。南塔越えが最大の難関なので、ここには食糧とアイスギア、ボルトキットをデポしておいた。この時点で悪天候となり、8日間にわたってポータレッジに閉じ込められたことを考えるとデポを設けたのは正解だった。南塔へのアステ・ルートには7日間を要し、頂上から南東バットレスを下った。カナダのコニー・アメリクセンとショーン・イーステンが2000年に拓い

4. その他（平成25年度のトピック等）

たこのルート（Hoth）は27ピッチ1,100メートルもあり、技術的にも難しい（5.10+ A4）。再び悪天候が迫るなか、途中でザックを捨てて身軽になり、4回も落石に襲われながらトーレ氷河に降り立ち、ザックを回収してBCに帰った。

3岩塔の縦走は02年にスティーヴ・シュナイダー（米）が果たしているが、このときは北塔も南塔も中央塔とのコルからそれぞれ往復しているの、北から南まで完全縦走したのは今回が初めてである。

ベルギーのセアン・ヴィラヌーヴァ、ステファヌ・ハンセン、メルラン・ディディエがセロ・カテドラルとコータ2000両ピークの東壁をフリー化した。カテドラルでは92年アメリカ隊のラ・エスコバ・デ・ディオスのフリーバリエーションで、ロス・ファブロス・ドス（1,000メートル、7c+）と命名。コータ…では93年イタリア・ルートをフリー化した（500メートル、7c+）。

帰国を控えたヴィラヌーヴァとハンセンはフィッツロイ（3,405メートル）でバリエーションを登った。北西壁下部を新ルートから登って、上部は既成ルートに合流する1,800メートル、5.12のラインである。帰国する航空便が決まっていたのでビバークする余裕もなく、夜通し登って翌日午後2時に登頂、そのまま北稜を下って翌朝6時取り付きに着き、エル・チャルテンへと急行して午後6時の空港行バスに間にあつた。登攀と下降で合計48時間を要した。新ルート部分は900メートル、7b+。

3月2日、イタリアのマッテオ・デッラ・ボルデッラとルカ・スキエラがトーレ・エガー（2,850メートル）西壁を初登攀した。1月に入山した一行はマッテオ・ベルナスコーニを加えた3人だったが、ウォームアップにシュタンハルトを登った以外は停滞の連続、時間切れとなったベルナスコーニは帰国してしまった。残った2人は基部の氷河に張ったテントで

1週間粘った末にチャンスを得た。2月28日の夜に出発し、翌日午後コル・デル・リュクス（ジョンゴ＝デ・ドーナのコル）に達し、前年の隊が追い返された大ハングを避けて4、5ピッチでビバーク、翌日エガーの頂上を踏んだ。

スイスのシュテファン・ジークリストとダニ・アーノルト、ドイツのトーマス・フーバー、アルゼンチンのマティアス・ピラビセンシオの4人が7月30日、セロ・トーレ（3,102メートル）西壁フェラーリ・ルートから冬季登頂に成功した。このルートの冬季第2登である。

ルイスとエクトルのソト兄弟にサポートされて28日にエル・チャルテンを発ち、翌日シュタンハルトのコルを越えて希望のコル直下でビバーク。30日未明に出発して午後遅くになって頂上に立った。ジークリストは99年に、悪いライムアイス（霜氷）に阻まれて最後の10mを登れなかったが、今回は風も弱く、最高のコンディションにめぐまれたと語る。4人が頂上を辞したのは午後5時半、ビバーク地に戻ったのは11時だった。翌日は風が強まるという予報があったためシュタンハルト越えはとりやめ、長駆パツ・マルコーニを経て9時間の雪中歩行の末ラゴ・エレクトリコの西岸でもう1泊、翌朝、迎えにきたルイスとエクトルに合流した。

2. チロエ島とフエゴ島

ボルカン・コルコバド（2,300メートル）はプエルト・モントの南、チロエ州の火山。チリのセルヒオ・インファンテ、イグナシオ・ベルガラ、アルマンド・モンテロは9月27日に漁船でチャイテンの港を出港し、45キロ航海して山麓の浜に上陸した。ここから森林限界まで登ってハイキャンプを設け、翌日24時間行動で頂上を往復した。最後の250メートルは傾斜70度（最高80度）の氷壁を8ピッチにわたってたど

り、最後にはハングした氷のマッシュルームを5メートルで頂上に立った。

コルコバドは1945年、チリ＝ドイツ隊のゲルハルト・クラウス、アルフレート・ガッシュ、ハンス・エンゲルスによって初登頂されたが、それ以来ただ1回しか記録が残っていない。93年、アメリカのダグ・トンプキンズがチリのカルロス・アルバラードと組んで行なったもので、トンプキンズが最後の250メートルをソロで頂上に立った。

南米大陸最南端、フエゴ島のサルミエント主峰（2,207メートル）が8月24日、じつに57年ぶりに第2登された。チリのカミロ・ラダとアルゼンチンのナタリア・マルティネスが北壁を初登、同時に冬季初登頂を成し遂げた。1956年3月のイタリア隊でカルロ・マウリとクレメンテ・マッフェイが初登頂して以来の第2登にあたる。

ラダとマルティネスは、コンウェイ氷河からスキーを使って北壁基部の台地に上がり、そこにハイキャンプを建てた。取付きのベルクシュルントでは、ライムアイスにおおわれたハングを5メートル登らなければならなかったものの、その先7ピッチは（5ピッチ目に出てきた垂直部を除いて）65度から75度の傾斜が続いた。傾斜がゆるんでくると深い雪に悩まされたが、19時間にわたる登攀そのものはほぼ順調に行なわれた。下降には10時間を要し、ルートはSuerte de Sarmiento（サルミエントの幸運、400m、D+）と名付けられた。

2人が苦勞させられたのはプロテクションで、アイススクリーをしっかりとねじ込むのに多大な時間を食われたという。また、つねに頭上をおびやかしているセラックも脅威で、「気温の高い夏だったらもっと危険だったろう」とラダは述べている。